小特集『天台座主記』の諸写本をめぐって

「『天台座主記』を読む会」の活動紹介

三枝暁子

本特集は、二〇一八年三月に発足した、「『天台座主記』を読む会」（通称「『天台座主記』探検隊」）の活動の成果をまとめたものである。

本研究会は、二〇一六年度から一七年度にかけて、三枝の学部ゼミ授業（中世史料講読）にて「天台座主良源起請二十六箇条」（黒田俊雄編『訳注　日本史史料　寺院法』集英社、二〇一五年）を講読したことを契機として、古代・中世の延暦寺史・寺院史に関心を持つ大学院生・学部生を中心に発足した研究会である。発足当初のメンバーは、杉田建斗・林遼・吉永光貴・戸瀬昌之・三枝の五名であったが、次第に数が増え、現在一六名となっている。

織田信長の焼き討ちをはじめとする政治権力との抗争、さらには寺院内部における抗争等によってたびたび焼失している延暦寺は、伝存する古代・中世史料が多いとはいえない現状にある。そのため古代・中世の延暦寺については、公家の日記や末寺・末社の史料、後世の編纂史料等を活用しながら研究されている現状にある。このようななか、澁谷慈鎧編『校訂増補天台座主記』（比叡山延暦寺開創記念事務局発行、一九三五年、以下「刊本」と表記）は、延暦寺開祖の最澄から昭和初期の第二四六世座主勝契の事績を中心に、古代から近代に至るまでの延暦寺の歴史をたどることのできる重要なテキストとなっている。ただし、典拠とされているものが複数の近世写本である点に留意する必要がある。

そこで、これらの写本系統を分析・整理することによって、刊本をより積極的に活用し、古代・中世の延暦寺研究を推進していくための道筋をつけたいと、本研究会を立ち上げた。研究会においては、授業で取り扱っていた良源のあとに座主となった尋禅以降の座主についての刊本の記述内容を、同時代史料等を用いながら検証する一方、集めうる限りの写本についての情報を集め、その系統を整理する作業を進めた。本小特集に掲げた論考および翻刻は、これらの研究会の成果をもとにして作成されたものである。

最初に、刊本が典拠としている写本を中心に、その内容と系統を整理した、杉田建斗氏による論考を掲げている。次いで戸瀬昌之氏によ

る、現時点で最古の書写年代を持つものと考えられる東京大学史料編纂所所蔵本『天台座主記』の翻刻を掲載している。そして三番目に、貝塚啓希氏による、独自情報に恵まれた京都府立京都学・歴彩館所蔵本『天台座主記』の翻刻を掲載している。

いずれの論考・翻刻も、月に一度開催されている研究会において、研究会参加者とともに議論を重ねた成果である。未だ検討の途上にあり、不充分な点も多々あるものと思われ、お読みいただいた皆様の御叱正・御教示によりながら、今後より検討を深めていきたいと考えている。

最後に、現時点での研究会メンバーを紹介しておく（注記のない者は東京大学日本史学研究室の所属）。

李昭賢、袁也、貝塚啓希、鎌田宜伸、高大成、小松原瑞基、志波英明、ジョージ・ウォラストン、杉田建斗、瀧野瀬未祐、戸瀬昌之、南平春太、野村航平（慶応義塾大学）、林遼（東京大学史料編纂所）、吉永光貴、三枝暁子